

幼児の仲間関係と自己の意図の客観的帰属との関係

吉村 齊¹⁾・上田 敏丈²⁾

Relations between peer interactions and young children's objective attribution
to their own intention

Hitoshi YOSHIMURA¹⁾ & Harutomo UEDA²⁾

Abstract

This study examines relations between peer interactions and young children's objective attribution to their own intention. Participants were 81 3-, 4- or 5-year-old kindergarteners. The intention was constructed by false belief, belief, desire, and intention. The research was conducted by interview method. The following results were obtained: The false belief scores of sociometric L-group in 3-year-old children were higher than those of H-group in 3-year-old children. However, the above results suggest that the development of children's playing styles may have an influence on their attribution to their own intention.

Keywords: peer interaction, attribution, intention, kindergartener.

問 題

幼児の仲間関係と社会性の発達が相互に関連しあうことは、多くの研究で指摘されてきた。例えば、中澤（2000）によると、集団生活を通して次第に他者の存在を意識し始め、働きかけながら遊ぶようになるとともに、自分の思いと相手に思いの違いに気づき、喧嘩を繰り返しながらともに遊べるようになるという。他者とのトラブルの経験を通して、重要な対人関係のスキルを学ぶことができるのである。すなわち、仲間との交渉を通じて、他者理解が発達するとともに、自己を客観的に理解する思考も発達することが示唆される。本研究では、仲間関係の特徴を示す指標としてクラス内における遊び場面の被選択数を取り上げ、その程度に応じて、自己の意図を客観的に帰属する過程が異なるか否かを検討する。

1) 高知学園短期大学 幼児保育学科
〒780-0955 高知市旭天神町292-26
Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College, 292-26 Asahi-tenjin-cho, Kochi, 780-0955

2) 中国学園大学 子ども学部（旧所属：高知学園短期大学 幼児保育学科）
〒701-0197 岡山市庭瀬83
Faculty of Children, Chugoku Gakuen University, 83 Niwase, Okayama, 701-0197

被選択数は、その子どもの特定集団における人気度を示す。人気のある子どもは、人気が低い子どもに比べると、頻繁に仲間を社会的に強化し、その傾向が青年期以降も続くことが考えられる (Michelson, Sugai, Wood, & Kazdin, 1983)。一方、拒否されることによって、否定的な社会的行動が出現しやすくなる (Kohn, 1977) だけでなく、将来の認知面や情緒面の発達の阻害、引っ込み思案との関連も深くなる (Waldrop & Halverson, 1975)。なぜならば、仲間から拒否されることによって、好ましい社会性を学習し、身につける機会そのものを失うからである。その結果、大人になってからも、不適応行動が継続することが予想される。幼児期の人気度は、社会性の学習を考える上で、重要な変数なのである。

Putallaz (1983) によると、人気のない子どもは、他者への働きかけは多いものの、進行中のやりとりを中断して、自分に注意を引こうとする行動が見られるなど、自己顕示欲が強かったという。衝動的に自己表現し、他者への配慮に欠く行動では、他者との調和的關係の形成と維持は期待できない (吉村, 2007)。人気のある幼児は、自分自身が仲間から十分に受け入れられていると知覚していることから (Paguio & Hollett, 1991)、他者への配慮と同様に、自己を客観的に捉え、自己の行為による他者への影響を正しく推論しているのだろう。Wellman (1990) によると、人の意図は、信念と願望から形成され、行為につながっていく。また、Perner (1989) は、信念の本質を理解している子どもは、誤信念も理解しているはずであると指摘している。すなわち、人気のある幼児は、人気の低い幼児に比べると、自己の信念 (あるいは誤信念) と願望および意図を客観的に正しく捉えていることが予想される。

従来、人気度と社会性の発達の関係は、主に他者とのかかわりに焦点を当てたものが多かった。他者理解が養われていない子どもは、人間関係をうまく築くことができず、不適切な知識構造が形成され、それが不適切な情報処理・社会的行動へとつながる一連のプロセスを歩むことが、鈴木・子安・安 (2004) より示唆される。それに比べると、自己を客観的に捉えていることと仲間関係の関連についてはあまり注目されていない。人気のない子どもには、攻撃的な傾向がみられ (Winder & Ran, 1962)、大人になってからも反社会的行動の発生率が高い (Morris, 1956) ことや、逆にストレス場面から消極的に退避し (Kagan & Moss, 1962)、将来引っ込み思案となっていく傾向がみられる (Waldrop & Halverson, 1975) ことは、自己を客観的に捉えることが困難であることも一因だろう。それゆえ、人気度と自己の客観視の関係を明らかにすることは、子どもの不適応を未然に防ぐ指導方法を考える上で、たいへん意義がある課題と思われる。そこで、本研究では、幼児を対象に、仮想場面における自己の誤信念、信念、願望、意図に関する帰属が、所属するクラス内の人気の程度に応じて異なるか否かを検討する。

なお、幼児の社会的地位と社会性の関係が男女間や年児間で異なることも示唆されてきた。吉村 (2001) によると、男児ではリーダーシップ、女児では協調性が、各自の人気度を規定し、その傾向は4歳児に比べると、5歳児で強かった。それゆえ、人気の高い子どもが誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属している傾向は、女児および5歳児でみられることが予想される。

以上のことから、本研究では、次の結果を予想して、検討を進めることとする。

仮説 人気の高い子ども、高くない子どもに比べて、誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属し、その傾向は女児および5歳児で強い。

方 法

調査対象者

A県内の私立幼稚園3歳児クラス25名 (男児9名、女児16名)、4歳児クラス25名 (男児13名、

女児12名), 5歳児クラス34名(男児13名, 女児21名), 合計81名であった。

手 続

遊び場面における被選択数の測定 調査対象者のクラス内における人気の程度(以下, ソシオメトリー)を測定するため, 1-3の場面を設定し, その様子を示した絵を提示しながら, 一緒に活動したい仲間を所属クラスの中から挙げてもらった。回答は3人まで記録した。

1. 動物園の場面: 動物園に行きました。馬さんに乗れます。(対象者の名前)が乗っているね。(所属するクラス)の中なら, 誰と一緒に乗りたいですか。
2. 砂場の場面: 砂場にトンネルを作ろうと思い, まず山を作りました。そしてトンネルを掘るのですが, 向こう側まで掘るのは大変です。そこで反対側から友達に掘ってもらうことにしました。(所属するクラス)の中なら, 誰と一緒にトンネルを掘りたいですか。
3. 乗り物ごっこの場面: 乗りものごっこをします。この車には1人だけお友達が乗ることができます。(対象者の名前)は, (所属するクラス)の中なら, 誰と一緒に乗りたいですか。

自己の意図の帰属の測定 調査対象者が, 自己の意図をどのように帰属しているかを測定するため, 子安(1997)の信念-願望シエマに関する課題を参考に, 以下の1-3の場面を設定した。Aには対象者自身, Bには選択された3人までに含まれていない子どもの名前を入れた。

1. クレヨンの場面: Aはクレヨンを大きい箱にしまって部屋を出ました。その後, Bが部屋に入ってきて大きい箱からクレヨンを出して1人で絵を描いて遊びました。しばらく絵を描いた後, Bはクレヨンを大きい箱ではなく小さい箱にしまって部屋を出ました。その後, Aが再び部屋に入ってきました。クレヨンで絵を描こうと思ったからです。
2. 積木の場面: Aは積み木を小さい箱にしまって部屋を出ました。その後, Bが部屋に入ってきて, 小さい箱から積み木を出して, 1人で遊びました。しばらく, 積み木で遊んだ後, Bは積み木を小さい箱ではなく大きい箱にしまって部屋を出ました。その後, Aが再び部屋に入ってきました。積み木で遊ぼうとしたからです。
3. ボールの場面: Aはボールを白い箱にしまって, 部屋を出ました。その後, Bが部屋に来てボールを出して1人で遊びました。しばらく遊んだ後, Bはボールを黒い箱にしまいました。そして, 部屋を出て行きました。その後, Aが再び部屋に入ってきました。ボールで遊ぼうとしたからです。

1-3の場面を示した図を提示しながら, 各場面について, 以下の(1)-(4)に関する質問を行った。

(1)誤信念に関する質問 Aはどちらの箱に取りに行くかを尋ねた。次に, 子安(1997)に基づいて, 正解なら2点, 誤りなら1点と得点化を行った。

(2)信念に関する質問 Bは「Aがボールを使っていた」ことを知っていたのか否かを尋ねた。この場合, Bが入室したときにAはいなかったことから, 「知らなかった」と回答した場合を正解として2点, 「知っていた」と回答した場合を1点とした。

(3)願望に関する質問 Bは「Aを困らせたい」と思って, 別の箱に移したのか否かを質問した。この課題には困らせる意図は含まれていないことから, 「困らせたいと思った」と回答した場合を1点, 「困らせるつもりはなかった」と回答した場合を2点とした。

(4)意図に関する質問 Bはどれくらい意地悪で移したと帰属したのかについて質問した。回答は, 意地悪の程度を4件法で示した図(吉村, 2003)を提示し, その番号を選択させた。この方法では, 点数が高いほど, 「意地悪」と帰属したことになる。

調査の実施

2006年12月上旬から中旬にかけて, 幼稚園内の教室やホールを使用して個別面接による調査を

実施した。

結 果

ソシオメトリーのグループ化

3つの場面による各児の1位での被選択数に基づいて、各年児の平均値（3歳児： $M=0.92$ ， $SD=0.79$ ，4歳児： $M=0.84$ ， $SD=0.83$ ，5歳児： $M=0.94$ ， $SD=0.88$ ）より高いか低いかに応じて、H群（ $N=32$ ）とL群（ $N=48$ ）に分類した。全体の平均値ではなく、各年児の平均値を分類の基準として用いたのは、クラスの人数が異なることを考慮したからである。ただし、結果的に、どの年児においても、1人以上から選択された者はH群に入ることによって共通していた。

自己の意図の帰属におけるソシオメトリーと性別の関係

まずは、自己の意図の帰属とソシオメトリーの関係が性別に応じて異なるか否かを検討するために、場面あたりの誤信念、信念、願望、意図各得点を従属変数、ソシオメトリーのグループと性別を独立変数としたソシオメトリー（2）×性別（2）の二要因分散分析を行った。多重比較は有意水準を $\alpha=.05$ としたTukeyのHSD法を用いた。

1. 誤信念：分散分析の結果、いずれにおいても有意差は認められなかった。
2. 信 念：分散分析の結果、いずれにおいても有意差は認められなかった。
3. 願 望：分散分析の結果、ソシオメトリーの主効果が認められた（ $F(1,75)=4.64$ ， $p<.05$ ， $MSe=.19$ ）。多重比較を行うと、H群（ $M=1.55$ ）がL群（ $M=1.33$ ）より有意に高かった。
4. 意 図：分散分析の結果、性別の主効果が認められた（ $F(1,75)=5.82$ ， $p<.05$ ， $MSe=.72$ ）。多重比較を行うと、男児（ $M=2.13$ ）が女児（ $M=1.65$ ）より有意に高かった。

自己の意図の帰属におけるソシオメトリーと年児の関係

次に、自己の意図の帰属とソシオメトリーの関係が年児に応じて異なるか否かを検討するために、誤信念、信念、願望、意図各得点を従属変数、ソシオメトリーのグループと年児を独立変数としたソシオメトリー（2）×年児（3）の二要因分散分析を行った。

1. 誤信念：分散分析の結果、ソシオメトリーと年児の交互作用が認められた（ $F(2,74)=7.59$ ， $p<.001$ ， $MSe=.11$ ，Figure 1）。単純主効果を検定するために、年児別にソシオメトリーの比較を行うと、3歳児ではL群（ $M=1.71$ ）がH群（ $M=1.27$ ）より有意に高かった（ $F(1,74)=11.29$ ， $p<.001$ ）。一方、4歳児ではH群（ $M=1.71$ ）がL群（ $M=1.46$ ）より高い傾向がみられた（ $F(1,$

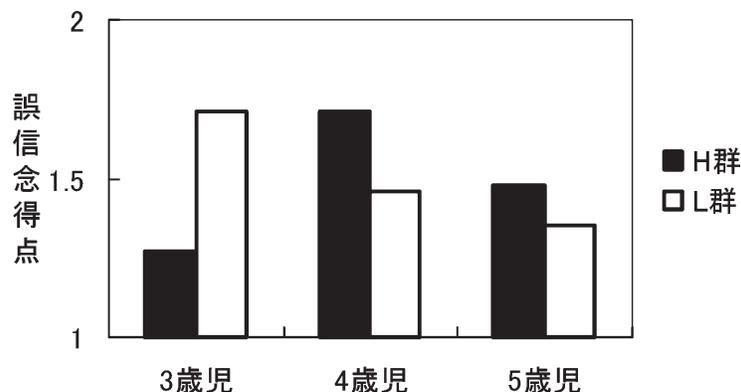


Figure 1 誤信念得点におけるソシオメトリーと年児の交互作用

74)=2.99, $p < .10$)。なお、5歳児ではH群 ($M=1.48$) とL群 ($M=1.35$) の間に有意差はみられなかった ($F(1,74)=1.05$, *n.s.*)。

また、ソシオメトリー別に年児の比較も行くと、H群では4歳児 ($M=1.71$) が3歳児 ($M=1.27$) より、L群では3歳児 ($M=1.71$) が5歳児 ($M=1.35$) より、それぞれ有意に高かった ($F(2,74)=3.96$, $p < .05$; $F(2,74)=4.74$, $p < .05$)。

2. 信念：分散分析の結果、年児の主効果が認められた ($F(1,75)=4.45$, $p < .05$, $MSe=.18$)。多重比較を行うと、5歳児 ($M=1.73$) が3歳児 ($M=1.38$) より有意に高かった。

3. 願望：分散分析の結果、ソシオメトリーのH群 ($M=1.52$) がL群 ($M=1.34$) より高い傾向が認められた ($F(1,73)=3.22$, $p < .10$, $MSe=.19$)。

4. 意図：分散分析の結果、いずれの有意差も認められなかった。

考 察

本研究では、幼児のクラス内における人気度に応じて、自己の意図を客観的に捉える程度が異なるか否か、またその関係に性差や発達差があるか否かを検討した。以下では、得られた結果に基づいて、仮説の検証に絞って考察を進めていく。

本研究の目的は、人気の高い子ども、高くない子どもに比べて、誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属し、その傾向は女児および5歳児で強いかな否かを明らかにすることであった。このことは、ソシオメトリーと性別、およびソシオメトリーと年児の交互作用を検討することで考察できる。本研究では、誤信念において、ソシオメトリーと年児の交互作用が認められた。しかし、3歳児のL群の誤信念得点が高いことから、仮説を支持する結果は得られなかった。

3歳児では、なぜ人気のない子どもの誤信念得点が高かったのだろうか。Parten (1932) の先駆的研究によれば、遊びの型は傍観、ひとり遊び、平行遊び、連合遊び、協同遊びの順に現れていた。3歳児では他者との深いかかわりを経験するにいたっていないことも考えられる。つまり、自己中心性が強く自分の遊びを前面に出して遊ぶことは、刺激的に映り、そのような遊びをする自己中心的な子どもの人気が高まると考えられる。このように、自己を客観的に帰属できていない子どもに人気が集まり、帰属できている子どもの人気が低いことから、予想に反する結果が得られたことが推察される。したがって、3歳児クラスのソシオメトリーH群の子どもたちが、その後の被選択数も多いのか否かを縦断的に検討しなければならない。

一方、4歳児では、3歳児とは逆に、H群の誤信念得点が高い傾向にあった。この時期になると、仲間とのかかわりも密になり、協調性を必要とする連合遊びや協調遊びに中心が移行することが、Parten (1932) の研究より示唆される。それゆえ、一定の目的のために一緒に遊んだり、自分のイメージを相手と共有したりしながら遊ぶようになるだろう。すなわち、自己中心的な活動をする子どもより、協調性のある子どもの人気が高いことが考えられる。ただし、5%水準での有意差は認められていない。5歳児についても、ソシオメトリーによる違いが認められなかった。遊びの型の発達だけでなく、道徳性の発達の影響も推察される。今後は、可能な限り状況変数を排除することが課題として残された。本研究で使用した課題も、妥当性と信頼性の検証、およびそれにとまなう改善が課題となる。さらに、仮想場面を対象とした量的分析に限界があるとすれば、観察法を導入するなど、質的分析の結果と照合して追究することも求められる。

以上のことから、本研究では仮説を支持する結果は得られなかった。今後、他の方法による検討と併せて考察していくことが、課題の1つとして残された。研究方法による結果の違いが明らかにされれば、理論を参考にして実践に取り組む保育者にとって、自ら指導方法を創造するよう

意識し、その具体化を目指す手がかりを得る上で意義がある。それは、保育者養成においても、子どもを理解する多様な方法の長所と限界を理解させ、理論と実践を関連づける教授方法の具体化を目指すためにも不可欠な課題といえる。

引用文献

- Kagan, J. & Moss, H. A. 1962 *A birth to maturity: A study in psychological development*. New York: Wiley.
- Kohn, M. 1977 *Social competence, symptoms and underachievement in childhood: A longitudinal perspective*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- 子安増生 1997 子どもが心を理解するとき 金子書房
- Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. 1983 *Social skills assessment and training with children*. New York: Plenum. (ミッチェルソン, L・スガイ, D. P.・ウッド, R. P.・カズディン, A. E. 高山 巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一(訳) 1987 子どもの対人行動—社会的スキル訓練の実際— 岩崎学術出版社)
- Morris, H. H. 1956 Aggressive behavior disorders in children: A follow-up study. *American Journal of Psychiatry*, **112**, 991-997.
- 中澤 潤 2000 友だち—仲間関係と友だち関係— 保育者と研究者の連携を考える会(編) 保育における人間関係 ナカニシヤ出版 Pp.36-37.
- Paguio, L. P. & Hollett, N. 1991 Relations between self-perceived and actual peer acceptance among preschool children. *Perceptual and Motor Skills*, **72**, 224-226.
- Perner, J. 1989 Is "thinking" belief?: Reply to Wellman & Bartsch. *Cognition*, **33**, 315-319.
- Parten, B. M. 1932 Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **27**, 243-269.
- Putallaz, M. 1983 Predicting children's sociometric status from their behavior. *Child Development*, **54**, 1417-1426.
- 鈴木亜由美・子安増生・安 寧 2004 幼児の社会的問題解決能力と心の理論の発達—「心の理論」との関連から— 発達心理学研究, **15**, 292-301.
- Wellman, H. M. 1990 *The child's theory of mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Waldrop, M. F., & Halverson, C. F. 1975 Intensive and extensive peer behaviors: Longitudinal and cross sectional analysis. *Child Development*, **46**, 19-26.
- 吉村 斉 2001 幼児期における社会的行動とクラス内地位の関係とその性差 高知学園短期大学紀要, **32**, 21-30.
- 吉村 斉 2003 子育てに悩んだ時の心理学 岩崎電子出版
- 吉村 斉 2007 中学生の適応感を規定する要因としての対人行動とその性差 心理学研究, **78**, 290-296.

付 記

本研究は、文部科学省「平成18年度大学教育高度化推進特別経費」教育・学習方法等改善支援経費の助成を得て実施された。調査は、2006年度「発達心理学Ⅱ」を受講していた高知学園短期大学幼児保育学科2年生70名の協力を得て準備・実施された。最後に、調査にご協力くださった

幼稚園の先生方・園児の皆様に深く感謝いたします。

(2007年10月1日受付；2007年11月16日受理)